わらべうたを用いた障がい児保育の実践

講師　和田　幸子　　京都光華女子大学教授

はじめに

京都光華女子大学の和田幸子です。よろしくお願いします。今日は、『わらべうたを用いた障がい児保育の実践』というテーマでお話しします。前半部分は、わらべうたを皆さんに体感してもらいます。障がいのあるなしに関わらず、子どもたちにやってあげてほしいと思っています。私は、元保育士で、保育園に勤めた後、障がいのある子どもたちの通園施設に長く勤めていました。京都光華女子大学で教え始めて 12 年たちますので、保育実践の話はずいぶん前のことになりますが、自分の記憶の中には鮮明に残っています。

Ⅰ.わらべうたで歌って遊んでみましょう

でべそ　でんでれべそ　へそにげた

子どものお腹を丸くなでながら歌う。

指先ではなく、手のひらを広く使って撫でてあげると、過敏の子どもでも楽しみやすいです。おむつ替えの時などにやってあげると楽しいわらべうたで、子どもが慣れて楽しめるようになったら、「にげた」の「た」のところで少し圧をかけるなど、変化をつけると、また楽しいでしょう。

はなちゃん　りんごを　たべたのね
でこちゃん

子どもの顔を見ながら、「はなちゃん」で鼻、「りんごを」で左右のほっぺた、「たべたのね」で口、「でこちゃん」でおでこ、を人差し指でさわる。

このわらべうたは、指先で顔を触るので、力を抜いて表面を触る程度にしてください。

勤務校の「乳児保育」の授業で、赤ちゃんの歯磨きについても学習しています。初めに歯が生えたときは、ガーゼで拭う程度でよいのですが、嫌がらず触らせてくれるとは限りません。赤ちゃんは、口の周りが過敏で触れたものに反応し、口をつむったり嫌がったりします。このようなわらべうた遊びで、口の周りを触りながら、過敏さをやわらげてあげましょう。ですから「赤ちゃんの歯磨きはいつから始めるの？」という質問には「生まれてからずっと、歯磨きをするための準備が必要です。過敏さをやわらげるために触ってあげる関わりをしてあげましょう。」と答えます。歯が生えていない時から、口の周りを少しずつ触ってあげるような関わりをしましょう。こんな日々の関わりの積み重ねが大事です。

あがりめ　さがりめ　くるっとまわって
ねこのめ
あがりめ　さがりめ　くるっとまわって
たぬきのめ
あがりめ　さがりめ　くるっとまわって
きつねのめ

子どもの顔を触る遊びとしても使える。目尻を指で上げたり下げたり、くるっと回したりする。

このわらべうたでは、赤ちゃんの場合は、顔を触るコミュニケーションを目的とし、少し大きくなるとお互いの顔の変化を見合ったり、子ども自身が変化した顔を確かめたりして楽しみます。

ろめんでんしゃに　みんなをのせて
いまにおちるよ　いまにおちるよ
すととーん　とん

子どもを膝にのせて、歌に合わせて上下にゆすり、「とん」で優しく膝から落とす。

密着し体温を感じる心地よさや、2 拍子のリズム感を共有します。そして最後に「とん」と優しく膝から落とします。落とし方は、子どもの年齢・月齢や個人差なども踏まえましょう。落ちるよ、落ちるよ…と期待して待つ子どもに、タイミングを合わせてとんと落としますが、そのタイミングを、歌いながら自分で調整できるのがわらべうたの良いところです。また、宙吊りになったような感覚を作り出し、「必ず（適度に）落としてくれる」と子どもも期待しています。わらべうたの音楽構造の中には、このような仕掛けがあり、それは、肉声で歌うからこそできることです。

おすわりやす　いすどっせ
あんまりのったら　こけまっせ

京都のわらべうた。子どもを膝にのせて、歌に合わせて上下にゆすり、「こけまっせ」のところで、膝から落とす。

こういった密着した遊びが大好きになる時期があります。子どもは、自分だけを抱っこしてくれるからやってほしいと思うのでしょう。

ぎっちらこ　ぎっちらこ　おふねが
ぎっちらこ
ぎっちらこ　ぎっちらこ　おふねが
ぎっちらこ

向かい合わせにして子どもを膝にのせて、両手をつなぎ、歌いながら前後にゆれる。

先ほどの、「ろめんでんしゃ」や「おすわりやす」は上下に動かしてあげるリズムの共有でした。「ぎっちら」は前後に揺らしてあげての、リズムの共有です。

次の「おらうちのどてかぼちゃ」では左右に揺れてみましょう。

おらうちの　どてかぼちゃ
ひにやけて　くわれない

向かい合わせになって子どもを膝にのせて、わらべうたに合わせて左右にゆれる。

このように、大人に支えてもらい上下、前後、左右等に揺れながら、バランス感覚を体験します。一緒にやってあげることが大事です。いろいろなバランスの中で、子どもは自分の体勢を整えていくという体験をしていきます。

ちいちゃん　ぱあちゃん　おにぎり
ちょうだい
かみにつつんで　おにぎり　ちょうだい

「ちいちゃん」でチー、「ぱあちゃん」でパー、「おにぎり」でグー、「ちょうだい」でチー、「かみに」でパー、「つつんで」でグー、「おにぎり」でグー、「ちょうだい」でチーを出す指遊びのわらべうた。

片手だけでしたり、両手でしたり、早いリズムでやってみたりしましょう。わらべうたは、アップテンポにして遊ぶものはあまりありませんが、これは手遊びなので可能です。時々やってみても楽しいかと思います。重要なのは、口で言っている言葉と手の動きが一致しているということです。

きちんとチー、グー、パーという手の動きをしましょう。手や足は体の末端です。このような遊びで、末端まで神経を行き届かせることを意識しましょう。一方、園で音楽を流して体操をすることがあると思います。そんな体操も楽しいのですが、意外と体がきちんと動いていません。気分が高まって楽しむのは、それはそれで良いのですが、子どもが体の末端まできちんと意識して動かすことも大切だと思います。

だいこんつけ　だいこんつけ　うらがえし
だいこんつけ　だいこんつけ　おもてがえし

手のひらを下にしてわらべうたに合わせて上下に動かす。「うらがえし」で手のひらを上にする。次に手のひらを上にして上下に動かし、「おもてがえし」で手のひらを下にする。

大きな動きではなく、素朴な動きです。一定のリズムに合わせて手を動かす簡単な動きなので、子どもも真似しやすく、とてもかわいい動きをしてくれます。みんなで一緒にやると、自然と共感の輪ができるようなわらべうた遊びです。

おらうちの　どてかぼちゃ
ひにやけて　くわれない

さきほどの「おらうちのどてかぼちゃ」を歌いながら、みんなの輪の真ん中にいる先生が、わらべうたに合わせて大きめの巾着袋を一人ずつ投げ渡し、受け取ったらまた投げ返すという遊びをした。

巾着の中にはお手玉が入っています。一つずつ手に持ってみましょう。子どもは、お手玉を手にしたら、ポンポンと投げては受けようとしますよね。楽器は、絶対に音を鳴らしますね。子どもってそんなものなんでしょうね。

てんてん　てんまり　てんてまり
てんてん　てまりの　てがそれて
どこから　どこまで　とんでった
かきねを　こえて　やねこえて
おもての　とおりへ　とんでった　とんでった

わらべうたに合わせて、お手玉を片手または両手を使って投げて、受け取ることを繰り返す。最後に、頭の上にのせる。それを両手の上に落としてキャッチしたり、のせたまま立ってその場を一回り歩いたりする。

わらべうたに合わせて、お手玉をポンポンポンと投げて受け取ることを繰り返します。片手で、または両手で、右手から左手へ、左手から右手へ、といろいろな手の使い方をして、手でお手玉を握る経験をたくさんしましょう。

お手玉を頭にのせると、子どもたちは背筋をシャンと伸ばしますね。一時的なものかもしれませんが、そんな時間がとても大事です。自分の体の中心軸を意識するような体験です。おしゃべりをしていた子どもが、黙って頭の上のお手玉に意識を向けます。その後の、頭を傾けてお手玉を両手で受け取る行為は、頭にのせているお手玉と受け取る手との距離を測りながら行い、自分の体と物との関係性を体験の中で知っていく体験です。お手玉の重さなども重要な要素になります。

このような遊びの中で、物との距離感や重量感を感じることが、道具を使うという行為へつながっていきます。道具を使うことは人間がもつ重要な能力です。スプーンでご飯を食べるのも、道具を使う始まりです。

あんたがたどこさ　ひごさ　ひごどこさ
くまもとさ　くまもとどこさ　せんばさ
せんばやまには　たぬきがおってさ
それをりょうしが　てっぽうでうってさ
にてさ　やいてさ　くってさ
それをこのはで　ちょいとかぶせ

みんなで輪になって座り、手拍子をしながら歌う。数名がお手玉を持ち、「さ」のところで、お手玉を隣の人に渡していく。歌の終わりに、お手玉を持っている人は頭にのせる。

この遊びでは、横の人にお手玉を回していきます。子どもは、前後の関係や上下の感覚というのは結構早く身に付きますが、横の感覚は難しいようです。それでも、遊びとしてやっていったら良いと思います。この遊びの場合は、全員がお手玉を持っていると大変ですから、適当な数にして遊んでください。この遊びでは、お手玉を受け取るタイミングを自分で計ることができません。手触りでお手玉が自分の手の中に来たことを察知します。予測がつかない事への、即時の対応を経験します。

お手玉を持ったり手放したりすることで、手全体を使って遊びます。私は学生の時、「手は突き出た脳だ」と学びました。5 本指をしっかり動かしたり、様々な手触りを感じたりすることが、脳への直接的な刺激になるという意味です。わらべうたを歌うことでお手玉遊びが持続し、リズムやテンポの共感等、共同的な遊びのきっかけともなります。ぜひ、お手玉を保育の中に取り入れてみてください。乳幼児の場合は、握って落とすだけでも意味を持ちます。そこにわらべうたを付けることで、ある程度継続して遊ぶことができます。

今度は、プレイクロス（60 ㎝×60 ㎝程度の大きさのオーガンジーのような透けて見える生地）を使ってみましょう。このような生地を手にすると子どもたちはすぐに頭に被りますね。透けて見えるので、圧迫感がないのでしょう。また、色もついているので通して見る世界観が変わります。

ずくぼんじょ　ずくぼんじょ
ずきんかぶって　でてこらさい
（ぬいてちょうだい）　（ひょい）

子どもと向き合い、保育者が頭にプレイクロスを被り、わらべうたに合わせて両手で頭を軽く叩いて拍子をとる。「ぬいてちょうだい」で、子どもがプレイクロスを引っ張って「ひょい」と頭から取る。

子どもと保育者がタイミングを合わせて「ひょい」とプレイクロスを取りましょう。取ってから顔と顔を見合わせる瞬間を子どもは期待しています。

ちゅっちゅっこっこ　とまれ
ちゅっちゅっこっこ　とまれ
とまらにゃ　とんでけ

プレイクロスを片手で持ち、わらべうたに合わせて上下に振る。「とんでけ」で、プレイクロスを手放して上に放り投げる。

プレイクロスのような布を手にすると、子どもは振ったり投げたりするものです。一人でしている行為に、わらべうたを付けることで、複数の子どもが同じタイミングでプレイクロスを手放す等、一緒に楽しむ遊びとなります。「とんでけ」と飛んでいく瞬間を、保育者と子どもたちで共感することが重要です。

うえからしたから　おおかぜこい
うえからしたから　おおかぜこい
こいこいこい　（それ）

プレイクロスを両手で持ち、わらべうたに合わせて上下に振る。「それ」で、プレイクロスを上に放り投げる。

「うえからしたから」では、両手でプレイクロスを持って上下になびかせます。クラスの中には走り回る子がいると思います。その子を良く見てみると、上半身がほとんど動いていないことに気づき、上半身を動かしてあげたいと思いました。腕を上げる爽快感を味わってほしいと思い、動機づけになるよう、プレイクロスやリボン等を使ってわらべうたで遊びます。

にぎりぱっちり　たてよこ　ひよこ
にぎりぱっちり　たてよこ　ひよこ
ぴよぴよ　ぴよぴよ

わらべうたに合わせて、プレイクロスを両手の中に入れ込む。「ぴよぴよ　ぴよぴよ」で合わせた手を開くと、プレイクロスが飛び出てくる。

「ぴよぴよ　ぴよぴよ」で手の中からゆっくりと出てくるプレイクロスは、子どもにとってマジック（手品）に見えるようです。少し関わりの難しい子どもも、プレイクロスの動きに驚き、興味津々で注目し、何度もリクエストしていました。先ほども伝えたように、手を使うことは子どもにとって大事な体験です。握りながら手で包み込み、適度な力加減で手から出すことで、花が咲くようにプレイクロスが広がっていきます。適度に手を開くということを体験します。

私たちは、愛情をもって子どもに接し保育したいと願っています。ただ、保育をするには、子どもの表現を引き出すような、ふさわしい物が必要です。そのような物探しをした方が良いと思います。確かに子どもは、石ころや木の枝でも遊びますが、子どもにふさわしいサイズ・感触・色合い等の教材を準備することも、私たちの仕事です。

だーるまさんがー　こーろんだ

わらべうたに合わせて、好きな所に向かって走る。保育者は持っているタンバリンを、「こーろんだ」の「だ」の時に、叩いて鳴らす。

次は二人組でしましょう。

なべなべ　そこぬけ
そこがぬけたら　かえりましょう

二人で向かい合い、両手をつなぐ。わらべうたに合わせて、両手を揺らし、「かえりましょう」で、つないだ手をくぐって、手をつないだまま背中合わせになる。そして、2回目の「かえりましょう」で、初めの状態に戻る。

二人➡四人➡八人➡十六人…と増やしていき、最後には全員で行う。

このわらべうた遊びを繰り返してすると、自然にみんなの輪ができます。障がいのある子は、なかなかみんなの輪の中に入ってきてくれませんが（見ててちょうだいね）という思いを持ちながら、他の子どもたちと一緒に繰り返していると、数か月後に入ってきてくれるような経験を私は何度もしました。

次は、占い遊びをやってみましょう。大人が子どもにしてあげる遊びです。二人組で大人役、子ども役になってしてみましょう。

おーなーべーふ
お：おしゃれ
な：なまけもの
べ：べんきょうか
ふ：ふまじめ

子どもの手の平を優しく叩き「どこが痛い？」と聞く。子どもが「ここ」と指さした箇所から、「おーなーべーふ」の唱えに合わせて、左右の親指の幅ずつひじの関節部分まで登っていく。関節部分まで登った時の言葉で、「あなたは、お：おしゃれ」「あなたは、な：なまけもの」と占う。

この遊びを一人の子にやっていると、他の子も次々と後ろに並んで列ができていました。「並びなさい」なんて私は言ってないのですが、子どもは自分もやってほしいという気持ちで来て並んでいます。ここにいれば、順番が回ってきて必ずやってもらえると思って並んでいますから、必ずやってあげましょう。１回やっても、またやってほしい子は、また列の最後尾に並びます。子どもと仲良くなるために、是非やってみてください。

次は、子どもたちに見てもらいたい活動も取り入れてみましょう。

こんこんさんあそびましょう　まだねてます
こんこんさんあそびましょう　いまねまあげてます
こんこんさんあそびましょう　いまはーあろてます
こんこんさんあそびましょう　いまごはんたべてます
なんのおかず？　たまごやきとあぶらあげとてんぷら
こんこんさんあそびましょう　いまいくわいな

ミトン型のお人形を両手につけて、問答歌の問いと答えに合わせて動かす。

ちょっとしたミニシアターです。わらべうたに合わせて、左右のお人形を動かします。このお人形は、百均で買ったミトンです。問いかけて答える、また問いかけて答える、という問答歌です。

もう一つ、ミニシアターに使えるわらべうたを紹介します。

はちべえさんとじゅうべえさんが　けんかして
おいかけられたり　にげたり
いどのなかに　おっこちて
ぽっちゃんぽっちゃんぽっちゃんぽっちゃん
あたまをうって　いてててて

両手の人差し指に指人形を一体ずつつけて、一体をはちべえさん、もう一体をじゅうべえさんとして、動かす。

指人形は動物や女の子、男の子等いろいろな種類のものが使えます。「キリンのはちべえさん」「ネコのじゅうべえさん」等、指人形を紹介して始めましょう。ミニシアターが始まると、さっきまで走り回っていたような子どもも、目の前に座ってじっと見ています。小さな指人形でも、じっと集中して見ています。このようなグッズを使うことで、わらべうたあそびが継続しやすくなりますし、グッズがあることで子どもたちが注目してくれます。それは、私が醸し出している波長に、子どもの方から近寄ってきてくれているということです。短い時間ですが、シアターの時間を大事にしたいと思っています。

Ⅱ.わらべうたを用いた障がい児保育の実践

では、皆さんと歌って遊んでみたわらべうたの音楽とわらべうたを用いた教育・保育実践の歴史について整理し、私自身が経験した実践を紹介します。

わらべうたの音楽的特徴

わらべうたは、西洋の音楽とは違う日本の音階から成ります。1960 年代に民族音楽家の小泉文夫さんが、東京の子どもたちが遊んでいるわらべうた遊びを蒐集して、音階を分析し、その音楽に一定の法則があることを発見しました。

・４度のテトラコルドの連結による音階

・強弱の区別のない２拍のまとまりを持った２拍子
・方言の違いが旋律の形に表れる
・わらべうた特有の旋律
・遊びの形式に従う楽式

といった特徴が、わらべうたには見られます。遊びながら歌うので、動きより歌が先行せず、適度な速度を保ちます。

わらべうたから始まる音楽教育

学校教育においては、わらべうたの音組成による基礎指導が盛んになった時期がありました。しかし、遊びのないところでわらべうたが教材化したため、本来の楽しさが失われ廃れてしまいました。

保育の場では、ハンガリーという民族音楽を大事にしている国に留学していた羽仁協子さんが、現地の保育園の実践を日本に紹介しようとしました。そして日本各地のわらべうたを用いた実践方法を提示しました。それをきっかけとして、わらべうたを使った保育が活発になった時期があります。

そのような流れを受けて、１９９０年代後半に、日本全国のわらべうたが掲載された本や都道府県別のわらべうたの本の出版が相次ぎました。

障がいのある子どもたちと

就学前知的障害児通園施設で障がいのある子どもを保育している時、なかなか仲良くなりにくく難しさを感じていました。リトミックをして体の動きや発声を促したこともあります。しかし、リトミックはピアノを弾く必要があるため、子どもとダイレクトにつきあえません。子どもと一緒に体を動かしたり、直接関わったりしたいと思い、幼少時に自分が遊んでいたわらべうたを保育に使ってみようと思いました。そんな私の思いを、園長や同僚が理解し、協力してくれました。

R 君の事例

R 君の事例を紹介します。

R 君（男児３歳５ヶ月）は、極小未熟児で生まれ、歩行訓練のためにリハビリセンターに通う傍ら、私のいる施設に通い始めました。出会った時にはまだ歩くことはできず、四つ這いで移動していました。甲高い発声のみで、発語はありません。その時まで、集団生活の経験はありませんでした。そのため、R 君は複数の子どもや複数の保育者がいる場での身のこなし方を経験しておらず、どう自分を表現するのかといったことが獲得できていないように思われました。私の勤務していた施設では、設定音楽あそびを大切にしていて、リトミックを含めた音楽あそびを１時間行っていました。その中で、わらべうたも実践していました。

設定音楽遊びの主な活動
①季節の歌
②呼びかけの歌
③ふれあい遊び
④行進、体操
⑤ゆらし遊び
⑥手具を使った遊び
⑦鑑賞
⑧ミニシアター

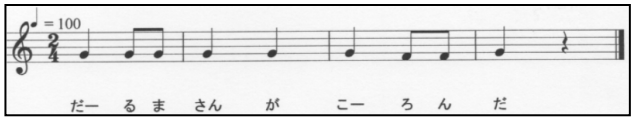
最初、R 君は、この設定音楽あそびの場に入れませんでした。皆の遊びの場から離れて行ってしまい、保育者がそばにいると大泣きをします。近くにいる他児や保育者をたたいたりつねったりして相手の反応を確かめ、相手が泣いたり怒ったりすると、声を上げて怒り、壁や床に自分の頭を打ち付ける、といった姿が見られました。まるで自分に近寄るな!と直接的な関わりを拒んでいるように見えました。経験不足であり、身体障がい、知的障がいも見られ、関わりの難しさを感じていました。とにかく、R 君に、遊びの面白さ・楽しさを知ってほしい、人と関わる経験をしてほしいという思いを持って、わらべうた遊びを続けていました。

エピソード1「だるまさんがころんだ」

まだ歩けない３歳のＲは、皆が走るその輪の中心で嬉しそうに四つ這いでくるくると回っていました。
「ヤー」と大きな声をあげ、そして皆の動きが止まったらＲは発声を止めていました。

そこで「だるまさんが」と歌いながらタンバリンを差し出すと、Ｒは「ころんだ」を歌いきるタイミングを待ち、手を伸ばし勢いをつけて叩きました。Ｒは歩いたり走ったり、話したり歌ったりすることはないのですが、一緒に「だるまさんが」を楽しんでいるのがわかりました。

ついにはわたしの手からタンバリンを取り、皆の歌う声と動きに合わせて振り、パンと鳴らして動きを止めることを楽しみます。身体、言葉の発達に遅れのあるＲが、こうして皆の遊びをリードすることもあるのです。

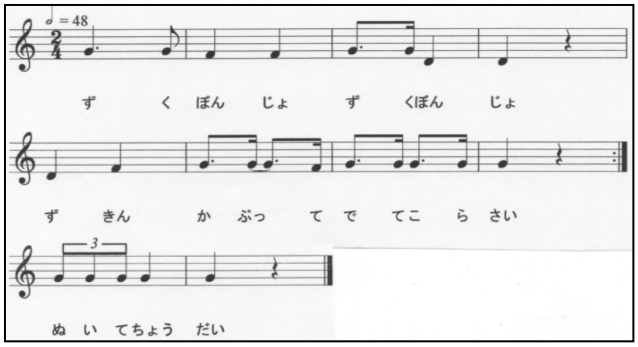


皆の遊びになじめなかったＲ君ですが、遊びの場の中にいるという経験を重ねて、「だるまさんがころんだ」の遊びをリードするという姿を見せてくれました。

エピソード2「ずくぼんじょ」

Ｒはわたしのところに来て、早々にわたしの頭上のプレイクロスを引っ張り、そして這って向こうへ行ってしまいます。このわらべうたを歌い終えるまで待てない、というより、Ｒにとってはわらべうた遊びではなくプレイクロスを引っ張るだけの遊びにとどまっているのだと思います。

わたしは、このわらべうたの拍感を味わってほしいなあという願いを持ち、他の子どもと歌い遊び続けました。

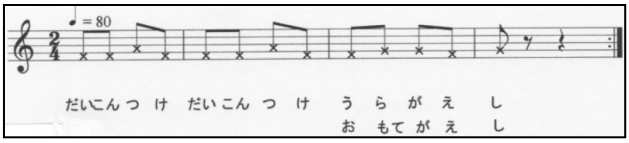


この時のＲ君は、このわらべうた遊びには、まだ興味がないけれど、プレイクロスやそれを被っている私の顔には興味がありました。歌と動きに気づく時が来ればよいなぁと願い、わらべうたを歌い続けていく中で、わらべうたを耳にしながら「いまか・いまか」というタイミングを待ち、「ほらっ」と笑顔が見られるようになりました。

エピソード3「だいこんつけ」

手のひらを下に向け、上に向けて、拍感を手の動作で刻むようにして遊んでいるのですが、Ｒは片手が突っ張り両手を揃えては動かしにくい様子でした。それでもわたしの動きを真似ようと、前に出した両手を上下に動かしています。緩やかな表情でわたしの顔を見つめています。わたしはＲを見て歌いながら両手を上下させることを続けます。

わたしとＲの「だいこんつけ」の遊びは、こんなささやかな一コマですが、仲良くなれたね、と確認しあえる出来事になりました。

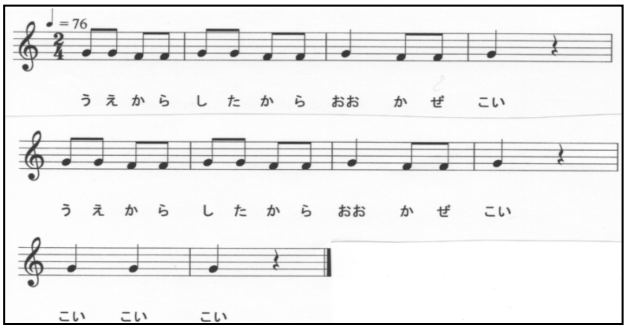


関わりが難しかったＲ君が、同じ波長に乗ろうとしてくれている、やっとＲ君とつながりかけたかな、と感じ、私はとても嬉しく思いました。その瞬間は、私とＲ君の間でのささやかな喜びですが、このような小さな積み重ねが人を育てていくことになるのだと思います。皆さんも保育をしていて理解されているとは思いますが、このような共感関係を繰り返し積み上げていくことが、人を育てていくことなんだと思います。わらべうたを歌い続ける・遊び続けることが、それを大いに助けると思っています。

エピソード4「おおかぜ こい」

20 枚の新聞紙を貼り合わせてバルーンのようにしたものを使って遊んでいました。保育者が端を持ち、歌いながら上へ、下へ、とゆっくりとなびかせます。新聞バルーンの下にいる子どもたちは、風を受け、バリバリという音を聞き、風圧も感じます。保育者はこのわらべうたを何度も歌い続けます。子どもたちがくぐり抜け、跳び上がり、大きな声を発しているうちに、新聞紙の穴、ちぎれが大きくなります。それでも端紙をなびかせて歌い続けます。

そんな中で、坐位のＲがくっと立ち上がりました。すぐに座るのですが、再び立ち上がる、ということを繰り返しました。



新聞を貼り合わせたバルーンは、風圧が結構あり、バリバリッという音も鳴り響きます。子どもたちは嬉しくて、飛び跳ねたり、大きな声を出したり、新聞紙をちぎったりしている、その中でR君が立ち上がりました。すぐに座りますが、また立ち上がります。大きな新聞紙のバルーンが上に上がるのにつられるように立ち上がっていました。身体障がいのあるR君が初めて自分の足で立った瞬間でした。R君は、その後少しずつ歩くようになってきました。

経験の乏しかったR君が、わらべうたあそびを続けることで、遊びの輪の中に入るようになり、保育者と少しずつ共感できるようになって、手足の動きが促され、ついには立つようになりました。わらべうた遊びをする場に居ることを重ねた結果として、R君の育ちを見ることができます。

R君は身体障がい、知的障がいのある子どもでしたが、他にも、自閉的な子どもや多動な子ども等、対応の難しい子どもを保育していました。室内にある肋木の上に、複数の子が登っていることも、度々ありました。「降りてきなさい」と言ったって降りてはきません。でも、わらべうた遊びを続けていると、高いところに上ってばかりだった子が、数か月後に、自分でスッと入ってくるようになることがあります。肋木の上から、みんなが歌ったり、ぐるぐる回ったりする空間を見ていたのだと思います。

そんな子どもの変化を、私たち保育者が信じられるかどうか、だと思います。私は、たくさんの経験を積んだことで「きっと変わる」と信じていました。「願いを持ち続けたら子どもは裏切らないんだな」という体験もしています。でも、本当のところは非常に難しい子どもにも出会っていて、何をしても変わらないように思え、失望を感じたこともあります。その子の場合は、私たちが望むような変容はしなかったけれど、親子参加していたお母さんが「この場にいて救われた」と言ってくださり「お母さんが救われたのならよかった」と思い直しました。卒園してからですが、過敏過ぎて歩けなかったその子が、成長して歩けるようになり「障がいは重篤ですが歩けるようになりました。ハッピーに学校に行っています」との連絡をいただきました。

わらべうた遊びをやったから障がいがなくなるというような容易い話ではありませんが、やり続けて、子どもにでも親にでも、何か一つ光が見えたら良いと思っています。そんな中で、その子を可愛いと思う人が増えていけばいいと思います。

ハンガリーの保育の紹介

ヨーロッパの中央に位置するハンガリーは、1989年まで、社会主義国として歩んでいました。ハンガリーは独自の文化を発展させており、就学前の保育においても、独自の実践方法を確立していました。ハンガリーの保育が充実しているということで、1990年後半にはハンガリーの保育が、音楽分野から日本に紹介され、取り入れられ始めました。自国の民族音楽・わらべうたを保育の中に大事に取り入れているのが、大きな特徴です。私も、ここ3年ほどハンガリーに毎年保育を見に行っています。ハンガリーでは、素朴に歌いながらわらべうた遊びを楽しんでいました。保育室にはピアノを置いていません。私たちは、日本の関西の地で、自分たちのわらべうたを大切にしながら保育をしていけばよいのではないかと思っています。

ハンガリーの保育の大きな特徴

ハンガリーの作曲家、音楽教育者、民俗音楽学者であるコダーイ・ゾルダーンは、「自国のわらべうたから音楽教育をはじめよう。」と、「コダーイ・システム」と呼ばれる音楽教育方法を確立し、

特に子どもたちの音楽教育に貢献しました。ハンガリーの保育には、

①乳児保育における育児担当制

　ハンガリーは育児担当制を生んだ国です。

②流れる日課

　子ども自身が活動を進めていけるような環境作り

③わらべうたを歌うこと

という３つの大きな特徴があげられます。大人が指示するのではなく、子どもが主体で、自ら選んで活動をしていくような保育をしています。一日中それぞれが好きなことをしているという訳ではなく、みんなでお集りをして、一緒にわらべうた、お話等を楽しむ機会も持っています。そのバランスがとても良いと思って、私は注目しています。

最後に

　本日は、わらべうたと障がい児保育をテーマに、実技をしたり、私の実践等も聞いてもらったりしました。多岐にわたる内容でしたが、何か皆さんの保育に生かしていただけたらと思います。障がいのある子どもの保育は難しいかもしれませんが、あきらめずに関わり続けてほしいと思います。直接的な関わりだけでなく「聞いててくれたらいいなぁ」「感じてくれたらいいなぁ」という思いで、わらべうた遊びを実践し、お互いにとって居心地の良い保育空間とはどんなものか、ということを探り続けていただきたいと思います。

　御清聴ありがとうございました。良いお仕事をしてください。

≪引用・参考文献≫
コダーイ芸術教育研究所：新訂 わらべうたであそぼう、明治図書出版、1998.
コダーイ芸術教育研究所:いっしょにあそぼうわらべうた０・１・２歳児クラス編、明治図書出版、1998.
尾原昭夫：全国わらべうた全集、柳書店、1985.

令和７年度第９回共同機構研修会
令和７年１２月１７日
於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館